

2024.01.19 (金) 9:30～

ディレクトフォース ヒアリング調査 報告会

(参加者敬称略)

まとめ

牧野)

現在、都市部で活躍されているシニアがどのようなことを考え、どんな価値観で生きているのかを把握することで、新しい講座を検討するための要素を抽出させていただくため、ご無理をお願いし調査させていただきました。

印象論になるが、この調査結果ではディレクトフォースの特徴がうまく表れたと言えるのではないだろうか。一つは、地方のように地域コミュニティのなかで退職された後に町内会活動や消防団などに関わるのが当然という生活をされている方々とは異なり、住んでいる地域を超え、日本やグローバルといった大きな社会の中で活躍をされている方々が多い集団だということである。ディレクトフォースの活動の趣旨にもあるが、幅広く活躍をしていけるように活動や条件をつくっているということからも結果が表れている。

二つ目は神谷美恵子の「生きがいを求める心」を構成する 7 つの欲求の中で、みなさんのお話から、他人からの「反響・評価」のため、また「自由」のための活動に関する発言が出なかったということだが、みなさんが今まで生きてこられた過程、すなわち学校を出て、企業で活躍され、役職に就かれてきた中で、非常に強い個人を持っているのではないだろうか。他人に何かを言われても、「正しいものは正しい、それをやらなければいけない」と言える強い意志があると感じた。自立し、強い個人である方々が互いに配慮し合いながら、ディレクトフォースの活動をもっと楽しくやっとう、貢献しようという理念に基づいて実行していく力を持っている。これは、都市型の新しいシニアの生き方なのではないだろうか。「自由」に対しては、自分で考え判断し、自分の自由が制約されずに実行する力を持たれている。自分の考え方を調整し、判断を繰り返していきながら、達成していくことにおいては自由であり、自由のために何かをしたいとあまり思われていないのではないかと思った。言い方を変えれば、目的思考型、また価値思考型の新しいコミュニティをつくり、活躍されているという印象である。日本、さらに国境を超えて世界に向かってきたこれまでの経験から、自分のあり方を判断する力を持っていることがディレクトフォースの魅力でもあるだろう。

係長や課長などの中間管理職で企業を退職される方も多くいるが、現在人材不足のため再雇用を推奨しているといっても、プライドが許さない方もいるのではないだろうか。会社を辞め、年金を受け取るまでにしばらく時間があるので、例えば駐車場の整理員や工事現場の交通整理をしている方々がいる。その方々に話を聞くと、「もういい、これでいい」という言い方をされる。今まで生きてきた自尊心が傷つけられ、家庭・生活があるから「もういい」ということになっているのではないだろうか。そういった方々も、地域社会

を持たずに働かれてきたために帰る場所が家庭しかないということが起きている。都市部で生活しているサラリーマンだった方々が退職された後に、どう生きていくのか、どのように生きがいを持っていくのか。今まで生きてきたプライドを保ちながら、新しい生き方を踏み出すところに、大きな障害があるのだろう。人は諦めてしまうと、生活がガタガタと崩れ、体調を崩したり、不安定になったりすることがある。プライドを持ちながら、次の新しい世界に行けるような橋渡しが必要だろう。

ディレクトフォースの大きな特徴として、次の世代への責任や想いがとても強く出ている。理科実験に積極的に関わられ、またオーバー80の会では小学校改革への提言をされ、もうじき本も出るときいている。ジェネラティビティ (generativity) といって、本来人間は社会的な生き物であり、自分が生を受け、またその受けた生を次へ伝えつなげていこう、恩を送ろうと生きている。先に生きる人間は、自分の経験や様々なものを次の世代に伝えようとする。先に生きる人間は去り、恩返しを受けられなくとも送り続けることによって社会が次へ次へとつながっていくという考え方がある。英語でも”pay it forward”、「ペイ・フォワード」という映画もあるが、前へ前へ、次へ次へと送っていくことで、社会がつながっていくという考え方のことである。心理学的にも、次の世代のために何かしたくなってくるものであるということが分かっており、自分の肉体には期限があるが、自分そのものが次へ次へと送られ、つながっていくことで充実感を持つようになり、死に対する恐怖心がなくなるという理論もある。最後は充実し、納得して安らかに最後を迎えられるようになるということも含めて、ジェネラティビティ、またはトランセンデンス (transcendence)、老年的超越が起こるといわれている。今までの社会は、どちらかというところ、経済合理性の中で年齢別に区切り、同一年齢の中で競争させることによって、活力を生み出そうとするような一面があった。学校も学年で分かれ、学年の中の子どもたちが競争して上に上がっていくことを繰り返している。企業も、新卒一括採用で同期がつくられ、同期間や社内で競争を繰り返していきながら、階層を上がっていく仕組みになっていたが、すでにそのような社会ではなくなってきた中で、改めてジェネラティビティとトランセンデンスを捉え直し、次の世代に送り、世代を超えた対話をしながら新しい価値を生み出していく。そして子どもたちは子どもたちなりにそれを受け止め、自分たちの生活や価値、さらには社会をつくっていくことに重要な役割を果たしておられるのではないだろうか。

人類の社会のあり方は、日本では都市部で生まれてきたという面がある。元々人間社会は、三世代の中抜きでつながってきていると言われ、祖父母と現役の働き世代、子どもの三世代のうち現役世代が中抜きになり、祖父母と孫がつながって文化は伝えられていく。現役世代が祖父母になったら自分の子どもの子ども（自分の孫）に伝えていくというように、親子でつながるのではなく祖父母と孫でつながっていたと言われている。「世代間」といえば「親子間」と考えるようになったのは戦後であり、地方から若者が東京に集中し、その若者たちが地元を離れて東京で結婚して家庭を持つようになってからである。親子で

つくられている社会は、競争に適した社会であり、家庭の中で親が子どもを一生懸命教育し、学校に送り込んで、学校で競争をし、進学競争・就職競争をして、企業に入ってから企業で競争しているため、家庭が地域コミュニティに足場を持たずに中で完結をしていることになる。子どもを学校に送り込んで競争を激化させていくうえで、親子の核家族という仕組みは効率的な組織といえる。しかし、足場を持っていないために、都市部の核家族は孤立し、子どもを通じて家族同士が父親の仕事や給料で競争するような仕組みになっていった。それによって経済発展したともいえるが、大量生産・大量消費の経済を拡大させていく時代が終わり、日本は少子高齢化社会になった。

ディレクトフォースでは、都市部の子どもたちのために一生懸命になるということが起き、家庭の中での三世代ではなくとも、都市部で三世代がつながりながら、孫が社会に位置づけられ、自分が活躍できると思えるような社会に向かっていくうえで、いい関係が生まれている。そこに日本社会の一つの可能性が見える。

一方で、今回のヒアリング調査から見えてきたことがある。みなさんが元気に活躍されている現在のその先に、最期はどこへ帰るのが問われる。大きい社会から帰る先は「家庭」だろう。ただし、直接家庭や地域に帰るのではなく、ワンクッション挟む仕組みが必要なのではないだろうか。体が動かなくなったり、あちこちへ行けなくなったりするなかで、家庭が置かれている地域・地場のコミュニティでいい人間関係をつくりながら、互いに助け合うような関係、特に震災などがあると近隣の関係が非常に大切になる。被災地の中でも、二次災害が小さく、災害関連死が少ないところがある。それは、コミュニティがしっかりしていて、互いを助け合う関係があるところである。

そのように考えていくと、現在大きな世界で活躍をされ、新しい都市や新しい社会のあり方を見せてくださっているこの先に、近隣の小さなコミュニティのなかで共助の関係をつくっていくことを考えると、不安な部分もあるのではないだろうか。これは、ディレクトフォースの問題ではなく、日本の社会課題の一つともいえるだろう。そこで100年財団では、社会で活躍されたその先で、ソフトランディングしながら今度は地域社会の担い手になってもらえるような仕掛けや仕組みを生み出すことで、最後まで生きがいを持って生きていくことが可能になるのではないかと考えた。日常生活で互いに助け合う関係・コミュニティをつくっておくことで、何か起きた時に被害が抑えられるようになる。そのようなことが、ますます求められてくるのではないかと考えている。私の感想は以上である。

感想・質疑

櫻井) 牧野先生の話に、同感する点が多くあった。ディレクトフォースの人が関心を持ってない分野に、講座を設定していくことは必ずしも世の中のニーズに合わないのではないかと思いながら聞いていたが、牧野先生のお話の最後で、家庭や地域におけるやるべきことや、その中で生きがいを考えていくことの必要性に触れられており、報告にあったディレクトフォースの人が今のところ関心を示していない「身近な地域での活動」を起こす

ための代謝の仕方や仕組みが重要になっていくという話につながっていて理解できた。今ダイレクトフォースのメンバーが取り組んでいることは尊重した上で、その先に自分自身が家庭や地域に世話になるとき、あるいはお互いに世話をする必要が生じたとき、自分はどうのように取り組んでいけるかということを中心に構えていくことが必要だと感じた。

藤村) 感想になるが、東大の辻哲夫先生も同じように、フレイルになり、動けなくなったら、動く場所は地域しかないということをおっしゃっていた。地域との関係を持たれているかと問われると、サラリーマンだった私も持っていない。近くの公民館などに行こうと思っても話が合わず、ここには居られないと感じる。さらに老人ホームで童謡を歌うのも嫌である。ダイレクトフォースをやめられる方がいらっしゃるが、その後どのように生活されているかわからない。元気で活躍できるうちはいいが、ダイレクトフォースの次のステップがない。地域でコミュニティをつくろうと思っても、どうしたらいいかわからない。牧野先生のご指摘のように、大きな課題であることは自覚しているが、解決策がないという状況である。

宮崎) 牧野先生のおっしゃる通りだと思った。地域で活動をしていて感じることは、先住の住民がいるということ。先住住民とは同世代の女性、おばさんであり、私たちが外で働いている間の40年ががちりと地域を抑えている。私も地域に入っているが、難しいと悩む側面もある。牧野先生がおっしゃったように、最後に帰る場所は自分の住んでいる身近な地域だということを改めて認識し、もう少し謙虚に女性たちの話を聞きながら、頑張ろうと思った。

牧野) 女性は強く、地域で元気である。ある意味で、みなさんがうまく女性の手のひらの上に乗れ、転がされるようになるといいのではないだろうか。みなさんにしかできないことがある。女性たちがみなさんをうまくこう転がしながら、いろんなことをやっていけるようになるとおもしろい。最初は癩に触ることもあるかもしれないが、徐々に心地よくなるということもある。

西村) シニアになってさまざま勉強会に参加するようになった。特にコロナになってからはリモートが盛んになり、月に8回勉強会をしている。ダイレクトフォースの中でも、リスクセンスといって組織を健康にすれば、組織犯罪はかなり防げるといったテーマの勉強会があったが、トップが意図的に犯罪をする企業は救いようがなく、どういう手法があるだろうかと疑問を呈するところで収まってしまった。また、原発で問題が起きた場合に、社会が正しい認識を持っているかという点も持っていない。原子力発電に対して正しく理解することは難しいが、本質を理解していなければ原発に対して賛成、反対は言えない。地球温暖化についても勉強してみると非常に深刻であるにもかかわらず、世界全体はのんび

りしている印象を持っている。中国では、現在でも石炭火力に力を入れており、温暖化が加速されている。さまざまな問題について勉強すると危機感が生まれ、同志で学び合い、拡散していく必要があるという想いを抱いている。

市古) 牧野先生の最後の話に、非常に共感した。観光立国研究会に属しており、12年前からまちおこしを進めてきているが、私自身も典型的な都市型人間であるが、小さなコミュニティをつくりながら進めていくことの必要性を痛感している。さまざまな制約があるなかで、コミュニティをつくりながら進めていくということを取り入れていく必要がある。地元の小中学生、高校生とのコミュニティをつくるといったことも考えられるだろう。牧野先生のお話、アンケート結果を聞いて、大変参考になった。

西村) 地域ではできていないが、高校の同期10名と新聞を読み、感じたことを話し合う集いをリモートで月に1回開催している。私たちはやがて足腰が弱くなっていった時に、つながれるはリモートしかないといったことを話している。大学寮の仲間とも開催している。

牧野) 今日リモートでつながり、新しいつながり方が可能になったことによって意見交換ができています。先ほど西村さんがおっしゃった世界的な大きな課題は、小さなコミュニティだけで変えていくことができる話ではない。気候変動の問題など、大きな問題に私たちも関心を持ちながら、一つの運動にしていく必要があるということも考える必要がある一方で、例えば足腰が弱くなった時、または地震が来た時に、オンラインが使えなくなることも考えておかなければならない。あの人がここに住んでいるから大丈夫だろうかと思っで見に来てくれたり、見に行ったりする関係があると、例えば発生後72時間以内に助け出し、励まし合って公助を待つことができる。そのような意味で、みなさんがやってこられていることから、さらにもう一步、自分の住んでいる場所を中心にしたコミュニティをどうするかという議論をしていく必要がある。

山本) 牧野先生に質問である。地域のコミュニティが大事なことは大変よくわかる。現在、町内会活動でさまざまな活動をやっているが、地域のみなさんに参加してもらうことが非常に難しく、活性化が課題である。全国的にも住民の6割が参加している町内会は御の字という状況の中で、町内会活動をどのように活性化できるか。

牧野) 町内会・自治会は今、全国的な課題になっている。組織率が下がり、家ごとの加入になっていたものが、少子高齢化や人口減少、一人暮らし世帯の増加により、「煩しいことは嫌だ」と考える人が増え、町内会への加入率が減り、活動が低迷するということが起きた。一方で、町内会や自治会に関心を持つ中高生が増え、高校生が町内会の役員になるような事例が出てきている。子どもたちの関心が、足元の地元、地域に向いてきていると言

える。その中から、社会問題・世界の問題を考え直したいという子どもが出てきているので、みなさんが取り組まれている子どもとの交流はやはり大事である。現在は、従来の町内会や労働者の共同組合ではなく、ワーカーズコープと呼ばれる生協のような形でみんなで出資をする生活協同組合のようなものをつくり、町内会経営をするという形式に切り替えているところもある。みんなで地域づくりを展開していくことにおもしろさや生きがいを感じられている方々が、町内会の代わりとなるものをつくって運営していく動きもある。従来の町内会の形式にこだわらずに提案をし、つくっていくことも考えられるのではないか。

坪井) これからは地場でのコミュニティをつくっていくことが重要だというお話があり、全くその通りだと思った。これまでに地場では活動をしてこなかったが、最近になって 50 軒ほどある町内の下水工事で全員の合意が必要ということになり、地域に関心が向くようになった。地域の奥さま方と会話をした際に、マンドリンやギターの同好会などさまざまなことをやられていることを知った。50 人全員が同じ方向を向くことはできないかもしれないが、その中でさらに小さな集団づくりから始めてみてはどうかと話している。健康や介護の問題を抱える人たちも出てくる可能性がある中で、とりあえず親しい人同士で連絡を取り合えるようにと呼びかけ始めたところである。これまでは、あまり自身の住む地域に目が向いていなかったが、今後は町内に目を向け、首を突っ込んでいこうかと感じた。

大水) 最後は地域と家庭に戻っていくこと、祖父母、親、孫の 3 代でつながっていくということが大変勉強になった。私自身も企業人間で生きてきたため、地域とはほとんど接点がない。都心では人の移り変わりが早く、町内会がほとんど機能していない。ただ、一年のうちの数回を地方で過ごし、その地域の人たちと非常に濃い関わりを持つようになった。地域での催しが活発であり、地域の人たちが、楽しんでる様子を側から見ていて、豊かだと感じた。私自身は、住んでいる都心の町内ではなく、もう少し手がかりのある地方へ移り、移住も視野に入れて地域に関わっていきたいと考えている。

牧野) 先日、演劇家の平田オリザさんとの話のなかで、震災が起こると最初に芸術関係の予算を切られるが、平田さんたちが開催されている舞台の上の芸術が社会の中で位置付き、みんなが楽しめるようになるためには地元の伝統芸能や祭りがしっかりなければならないとおっしゃっていた。今回の能登半島地震も同様だが、まずは生活をなんとか立て直さなければならない状況の次には多くのところで祭りを復活したり、伝統芸能を子どもに教えたりという要望が出てくるものである。最初はさまざまな支援が入るが、その後地元から出てくる意見は、お金ではなく伝統芸能を子どもと一緒に練習がしたいといったことである。よそから来た人たちは、こんな大変な時に何を言っているのかと言うが、地元としてはそうではなく、舞をすることによって自分たちが役に立ち、子どものために一生懸命な

れるという気持ちを確認しながら、助け合う関係をつくっていく方向に持っていくことができるのが、伝統芸能の大きな力だとおっしゃっていた。地方の豊かな文化があるところに移り、共有しながら、それぞれが役に立てていると思えるような生活をされることはとてもいいことだと思う。

小林) 現在、ディレクトフォースの広報としてホームページを担当することがあるが、理科実験の活動を発信しているが、知っている人は知っているが、知らない人は知らないという状況で、いかに社会に発信していくか日々悩んでいる。男の美学として、黙っていても知っている人が知っていれば良いという想いでやってきたことが、今になって悩んでいる。

西上) 代表の段谷さんにヒアリングをさせていただいた際に、ディレクトフォースには女性が少ないと話されていた。実際に今回のヒアリング調査も、女性の方には一名しかお伺いできていない。女性は、いいな、おもしろいなと思うと、その話を一日に何度もする。女性の比率を高めていくことで、女性の美学が入り、おもしろいから誘う、楽しいからみんな来るといったことにつながるのではないだろうか。

段谷) 女性会員は、ディレクトフォース会員 600 名弱のうち 37 名ほどと少ない状況である。女性の数を増やすことも重要だが、現会員の女性がより活発に、自由に活動できるような雰囲気をつくっていくことも大切だろうと感じている。

地域社会、小さなコミュニティとどのように関わっていくかが課題ということは認識しており、地域デザイン総合研究所をつくり、牧野先生に所長になっていただいている。ディレクトフォースでは、さまざまな活動の目標があるが、600 名弱の会員が、ディレクトフォースに入って本当に良かったと満足できる、プラットフォームであることも大きな目標の一つである。今回、専門の方に入ってもらい調査に入ってもらうことになり、期待しているところである。現在、ディレクトフォースの平均年齢は 72 歳ほどである。牧野先生の今日のお話は、会員全員に聞いてもらいたい。

以上